

献辞

高倉泰夫教授は、昭和21年1月、福岡県福岡市に生まれ、昭和45年3月佐賀大学経済学部経済学科を卒業後、昭和47年3月まで九州経済調査協会で嘱託研究員としてご勤務されました。昭和52年3月に九州大学大学院経済学研究科博士課程を満期退学後、九州大学経済学部助手を経て、昭和54年4月に長崎大学商業短期大学部講師として採用され、昭和57年4月に同助教授に昇任されました。昭和59年の商科短期大学部への校名変更後、平成元年5月に同教授となられ、平成9年10月の商科短期大学部の廃止に伴い、長崎大学経済学部教授となられ、平成23年3月31日をもって定年退職されました。

先生は、商科短期大学部では主として経済原論と金融経済論を、本学部では主として政治経済学を担当されたほか、商科短期大学部・経済学部における各種のゼミ、全学教育においては、経済と経営、教養セミナー、大学院博士前期課程においては、政治経済学特講を担当され、学部学生や院生の指導を熱心に行ってこられました。

研究面では、先生は、一貫して、マルクスの著作の形成過程を追跡して、現代の資本制的生産の基礎理論を構築することに努めてこられ、その成果の一端は、『生産諸関係論としての経済学の成立』（平成元年、九州大学出版会）として上梓されています。そこでのポイントは、マルクス経済学の各カテゴリーは、それぞれが「物象化」した生産関係であり、その生産関係の複合体、すなわち「生産諸関係」として、資本制的生産を分析しようとするところにあるといえるでしょう。そして先生が構築された理論は、『資本論』を、一つの完成した体系として捉えるのではなく、『資本論』を未完成の、それゆえに今後も展開しうる可能性をもった体系として捉えることを提唱したものということもできるでしょう。先生は、本書の刊行後も、多くの論文をコンスタントに発表されていますが、それは未完成の体系の展開を試み続けた努力の現われだと思えます。

学会活動も活発に行われ、経済理論学会、信用理論経済学会、金融学会、証券経済学会、社会システム経済学会、進化経済学会など多くの学会に所属されておられました。

高倉先生という、膨大な書籍に埋もれた研究室が有名です。本棚各層に前後二重に書籍を並べるだけでは収まらず、床の上、机の上、いすの上、スペースというスペースには、書籍がたかく積まれていました。この書籍の背後には、研究者は常に「八宗兼学」でなければならないという信念があったのだと思います。余談ですが、研究室が近かったこともあり、私は、先生から何冊か本をもらったことがあります。その中の一冊に、別府正十郎著『資本会計の経済理論』（森山書店）があります。別府先生は、一時期長崎大学経済学部で教鞭をとられた会計学者で、長崎大学在職時に出版された本書は資本会計の研究者には今でも必読書とあってよいと思います。本書のコピーしか持っていなかった私には、宝物をもらったような気分だったことをよく覚えています。

高倉先生は、商科短期大学部及び経済学部を通じて長年にわたり長崎大学に奉職されてこられました。先生の長年にわたる多大な貢献に、教職員を代表して改めて感謝申し上げるとともに、今後のご健勝とご活躍を祈念して、献辞とさせていただきます。

平成23年 8 月

長崎大学経済学会長

長崎大学経済学部長

岡 田 裕 正



高倉 泰夫 教授